

60～85歳の男女700名に聞いた 『人との絆やつき合い方』 ～「無縁社会」の実態～

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 長谷川 公敏）では、全国に居住する60歳～85歳の男女700名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

《調査結果のポイント》

別居家族との会話頻度(P. 2)

- 別居する家族と頻繁に連絡する人は29.8%

近所づきあい(P. 3)

- 「日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている」が45.8%

近所づきあいと暮らしやすさ(P. 4)

- 「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」人は78.1%

友人の有無(P. 5)

- 高齢男性の11.3%は「友人がいない」

困ったときに頼りになる人(P. 6)

- 困ったときに頼りになるのは家族。

家族とのきずな(P. 7)

- ひとり暮らし高齢者の25.5%は、家族と強いきずなで結ばれていると思わない

＜お問い合わせ先＞

（株）第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当（安部・新井）
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本冊子は、当研究所から季刊発行している『ライフデザインレポート』Summer 2011.7をもとに作成したものです。当該レポートは、左記のホームページにて全文公開しております。



《調査の背景》

2010年1月にNHKが「無縁社会」をテーマに放映したドキュメンタリーは、大きな反響を呼び、流行語大賞にもノミネートされました。

同年夏には、生存していれば111歳とされていた男性の白骨遺体が東京都区内で発見された事件を受け、各自治体で高齢者の現況把握調査を緊急実施したところ、所在確認ができない100歳以上高齢者が複数存在することが発覚しました。9月10日に法務省が発表した資料「所在不明高齢者に係る戸籍事務について」によれば、現住所が確認できない100歳以上の高齢者は全国で23万4,354人もいました（120歳以上は77,118人）。

ところで、人との関係性を調査する視点のひとつに、政治学者ロバート・パットナムの研究成果が発端となったソーシャルキャピタル（SC）の概念があります。SCについてはさまざまな定義がありますが、宮川・大守の「人間がつくる組織における相互の間の信頼、規範、ネットワークのようなソフトな関係」、稲葉の「社会における心の外部性を伴った相互の間の信頼、互酬性の規範、きずな」が分かりやすいと思われます。内閣府の調査では、SC醸成につながる個人の信頼・ネットワーク・社会活動の形成が生活上の安心感につながり、コミュニティへの高い評価が生活上の安心感を高めるという結果も示唆されています。

そこで、SCの考え方に準拠したアンケート調査を実施し、高齢者の人づきあいやきずなの実態を概観し、社会の無縁化の背景について考察しました。

《調査の実施概要、回答者の特性》

調査の概要は次の通り。

＜調査対象者＞ 60歳から85歳までの全国の男女700名（第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出）

＜調査時期＞ 2010年8月27日～9月12日

＜調査方法＞ 郵送調査法

＜有効回収数＞ 665名（有効回収率95.3%）

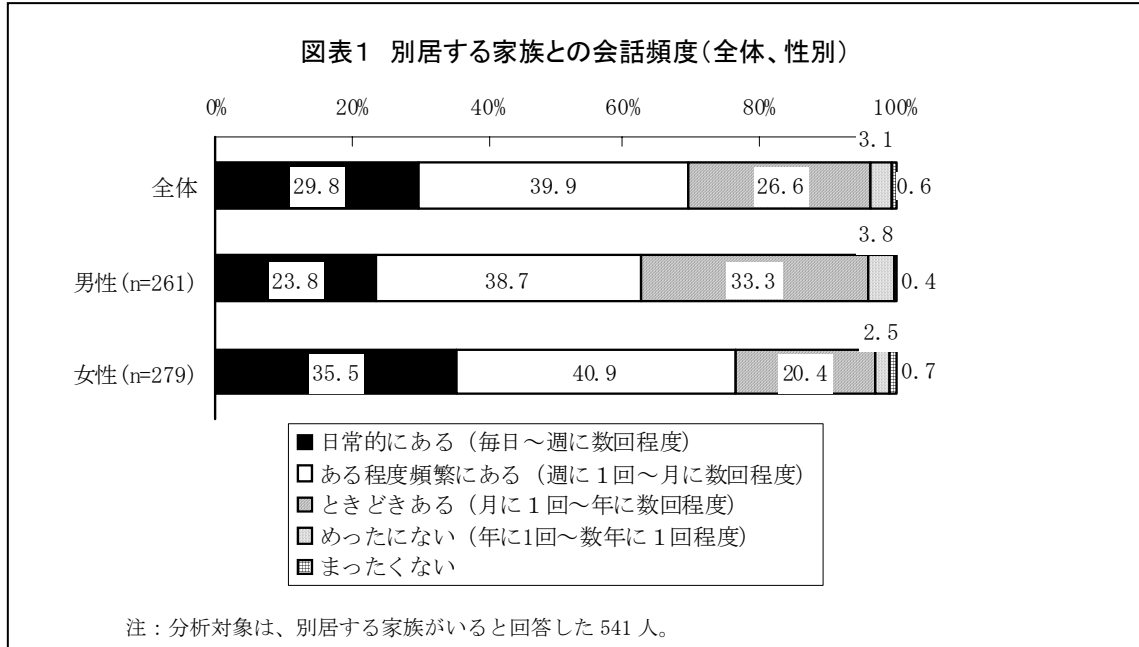
＜属性＞

（単位：人）

	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75歳以上	性別合計
男性	95 (28.7%)	93 (28.1%)	94 (28.4%)	49 (14.8%)	331 (100.0%)
女性	99 (29.6%)	96 (28.7%)	93 (27.8%)	46 (13.8%)	334 (100.0%)
年齢層合計	194 (29.2%)	189 (28.4%)	187 (28.1%)	95 (14.3%)	665 (100.0%)

別居家族との会話頻度

別居する家族と頻繁に連絡する人は 29.8%



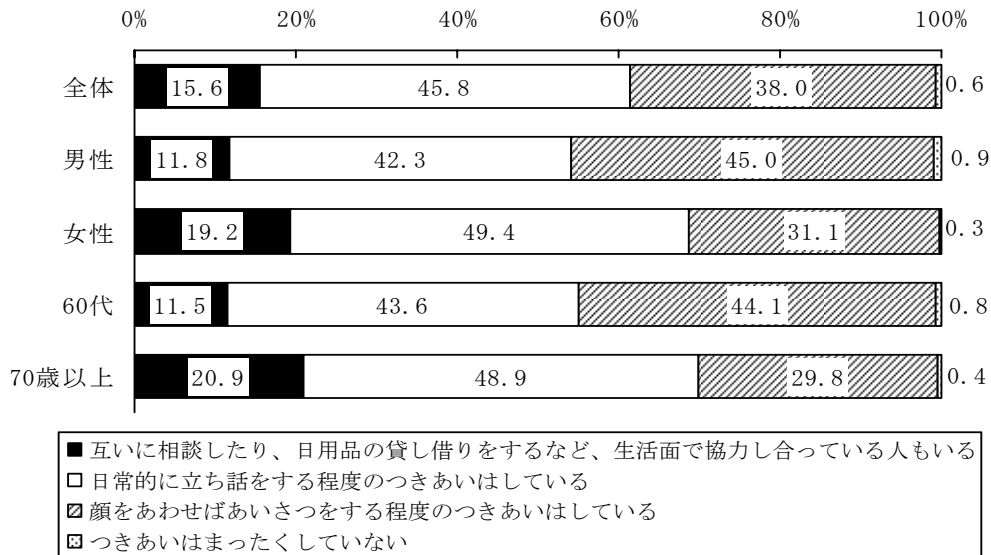
調査対象者のうち、別居する家族がいる人は 541 人、全体の 81.3%を占めました(図表省略)。別居する家族がいる人に対し、その家族とどの程度の頻度で会話(電話やメールを含む)をしているかをたずねた結果が図表1です。「ある程度頻繁にある(週に1回～月に数回程度)」が39.9%と最も多くなりました。「日常的にある(毎日～週に数回程度)」(29.8%)を合わせると、69.7%と約7割の人は、週に1回以上、電話やメールを含む会話をしていることになります。

性別でみてみると、女性では「ある程度頻繁にある(週に1回～月に数回程度)」(40.9%)、「日常的にある(毎日～週に数回程度)」(35.5%)の順で多いのに対して、男性では「ある程度頻繁にある(週に1回～月に数回程度)」(38.7%)、「ときどきある(月に1回～年に数回程度)」(33.3%)と続いており、女性に比べて会話頻度が少ない人が多いようです。月に1回以下しか、別居家族と会話をしない男性は37.5%もいます。

近所づきあい

「日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている」が 45.8%

図表2 近所の人とどの程度のつきあいをしているか(全体、性別、年齢層別)



ふだん、近所の人とどの程度のつきあいをしているかたずねた結果が図表2です。「日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている」と回答した人が 45.8%と最も多く、次いで「顔をあわせばあいさつをする程度のつきあいはしている」が 38.0%となりました。

しかし、「互いに相談したり、日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力し合っている人もいる」と回答した人は 15.6%にとどまり、近所の人たちと濃密な人間関係を持っている人は少ないことが分かります。

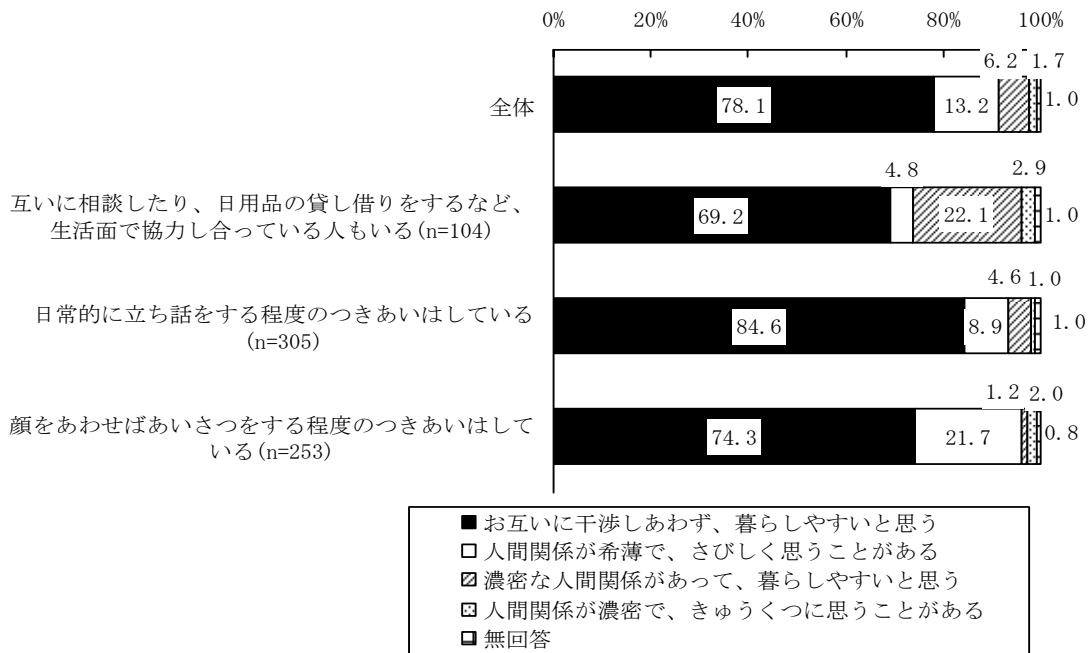
性別にみると、男性では「顔をあわせばあいさつをする程度のつきあいはしている」と回答した人が 45.0%と最も多いのに対し、女性では 31.1%と大きな差があります。一方、女性では「日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている」人が 49.4%とほぼ半数いることから、近所とのつきあいが濃密な人は男性より女性に多いようです。

また年齢層別にみると、60代では「顔をあわせばあいさつをする程度のつきあいはしている」と回答した人が最も多く、44.1%もいるのに対して、70歳以上では 29.8%にとどまり、「日常的に立ち話をする程度のつきあいはしている」人が 48.9%と多くなります。総じて、60代は70歳以上に比べると、近所の人たちとの関係が希薄な人が多いといえます。

近所づきあいと暮らしやすさ

「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」人は 78.1%

図表3 近所の人とのつきあいについて(全体、つきあいの度合い別)



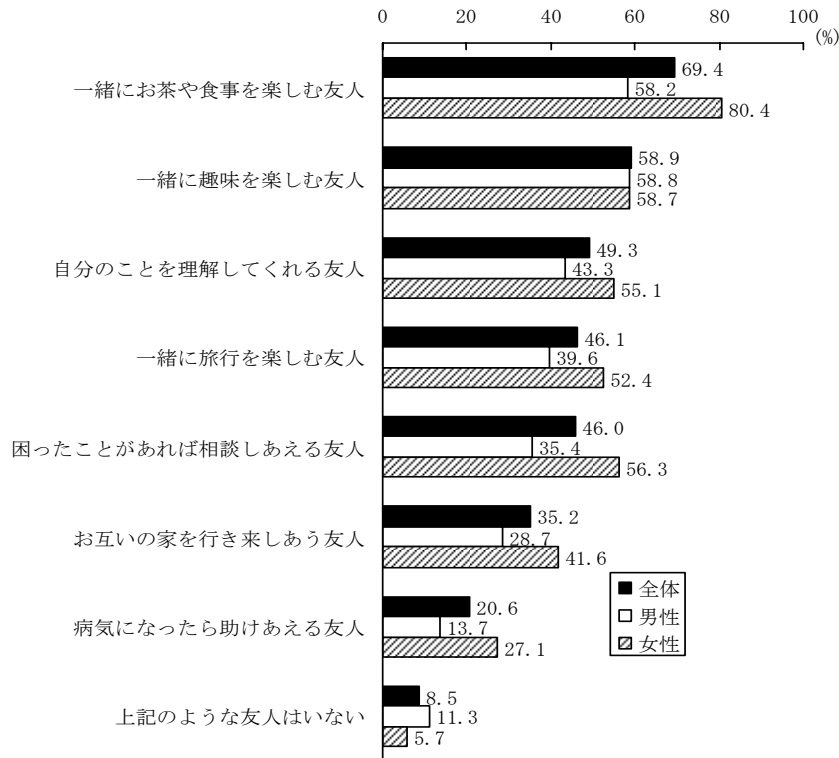
暮らしやすさについてたずねた結果が図表3です。こうしたつきあいについて、「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」と回答した人が78.1%もあり、「人間関係が希薄で、さびしく思うことがある」と回答した人(13.2%)を大きく上回りました。なお、性別、年齢層別、居住年数別では、特筆すべき特徴はありませんでした。

しかし、つきあいの度合い別にみると、「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」「濃密な人間関係があって、暮らしやすいと思う」をあわせると、暮らしやすさを評価する人が最も多かったのは、つきあいの度合いが高い「互いに相談したり、日用品の貸し借りをするなど生活面で協力し合っている人もいる」人であったことから、近所との交流は個人の暮らしやすさの向上に重要であると考えられます。

友人の有無

高齢男性の 11.3%は「友人がいない」

図表4 友人の有無(全体、性別) <複数回答>



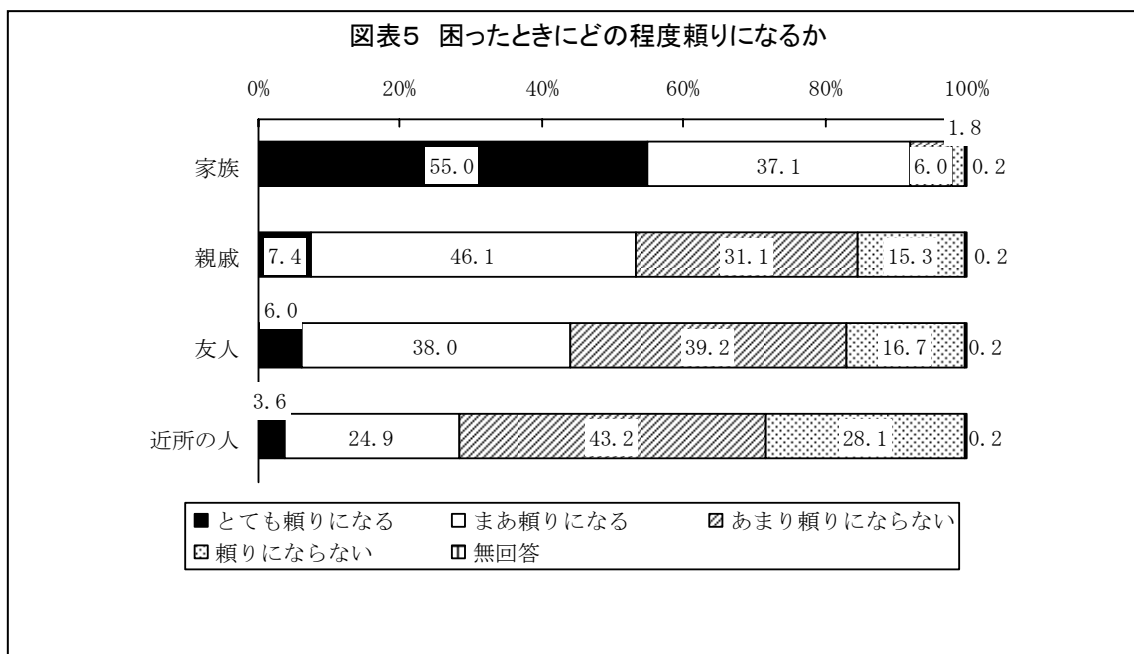
7項目の友人関係を挙げ、どんな関係の友人がいるかを複数回答で選択してもらった結果が図表4です。回答率が過半数を占めたのは「一緒にお茶や食事を楽しむ友人」(69.4%)、「一緒に趣味を楽しむ友人」(58.9%)でした。

性別にみると、女性では「お互いの家を行き来しあう友人」「病気になったら助けあえる友人」以外はすべて回答率が過半数だったのに対し、男性では「一緒に趣味を楽しむ友人」(58.8%)、「一緒にお茶や食事を楽しむ友人」(58.2%)のみが過半数でした。

また男性では、「上記のような友人はいない」と回答した人は11.3%と、友人がいない人が1割を超えていました。男性は、お茶や食事、趣味などで時間を共有する友人がいる人は多いものの、「自分のことを理解してくれる友人」や「困ったことがあれば相談しあえる友人」など、精神的な支えとなりうる友人がいる人は女性に比べて少ないようです。

困ったときに頼りになる人

困ったときに頼りになるのは家族。



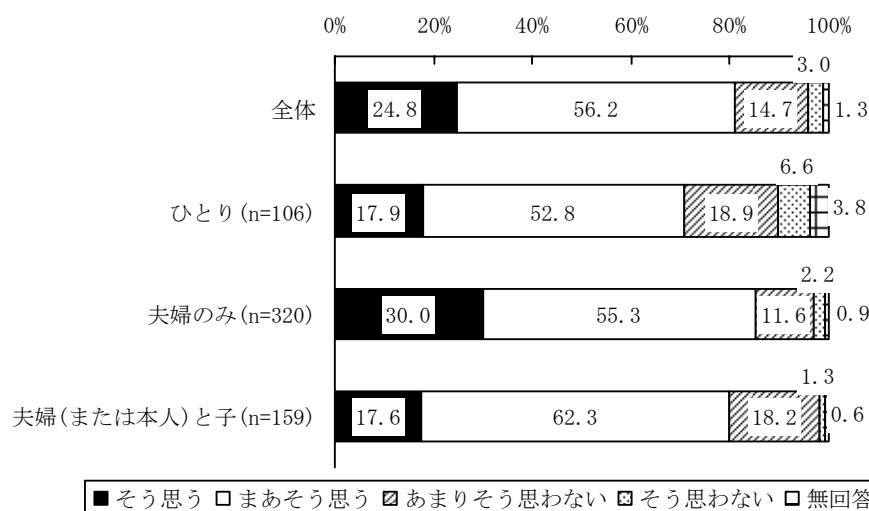
自分が困ったときに、家族、親戚、友人、近所の方は、それぞれどの程度頼りになると思うかをたずねた結果が図表5です。

家族が「とても頼りになる」と回答した人は55.0%と過半数を占めました。親戚、友人、近所の方が「とても頼りになる」とした人は1割にも達しませんでした。「まあ頼りになる」を合わせると、親戚では53.5%と半数を超えますが、友人や近所の方が頼りになると思う人は半数を下回りました。高齢者にとって、「自分が困ったときに頼りになるのは家族」ということのように。

家族とのきずな

ひとり暮らし高齢者の 25.5%は、 家族と強いきずなで結ばれていると思わない

図表6 家族と強いきずなで結ばれているか(全体、同居形態別)



家族と強いきずなで結ばれているかをたずねた結果が図表6です。

家族と強いきずなで結ばれていると思っている人は、全体では81.0%（「そう思う」24.8%＋「まあそう思う」56.2%）にのぼりますが、同居形態別にみると、「ひとり」と「夫婦のみ」では、大きな差があることが明らかになりました。

ひとり暮らしの人では、家族と強いきずなで結ばれていると思わない人が25.5%（「あまりそう思わない」18.9%＋「そう思わない」6.6%）もいましたが、夫婦のみ世帯では13.8%（「あまりそう思わない」11.6%＋「そう思わない」2.2%）と、10ポイント以上の開きがあります。

一方、「夫婦（または本人）と子」世帯では、「そう思う」と回答した人は17.6%と全体平均を7ポイント以上下回っていました。同居する家族がありながら、家族と強いきずなで結ばれていると思わない人が19.5%（「あまりそう思わない」18.2%＋「そう思わない」1.3%）もいました。

困ったときに頼りになるのは家族だと考えている反面、同居家族がいるにもかかわらず、家族と強いきずなで結ばれていると思わない高齢者が2割もいるという事実は衝撃的です。

《研究員のコメント》

本調査の結果、高齢者にとって、別居家族以外との交流は活発とはいえず、「親戚づきあいがわずらわしい」、あるいは、近所の人と挨拶だけのつきあいが「お互いに干渉しあわず、暮らしやすいと思う」人が多いことが明らかになりました。さらには飲食を共にする友人はいても、助け合ったり、相談しあったりできる友人がいない人も少なくないうえ、困ったときに頼りになるのは家族だけだと考えている反面、家族と強いきずなで結ばれていると思わない高齢者も少なくありませんでした。

自立できる間はそれでもよいでしょうが、たとえば介護が必要になったり、大災害に直面したりした場合、他者との強い信頼が万が一の際の安心感につながることは言うまでもありません。とはいえ、信頼は一朝一夕に築き上げられるものではありません。3月の東日本大震災で、首都圏で物資買占めが起きたことも、社会への信頼の欠如による不安感があったことは否めません。社会への信頼、周りの人への信頼が薄らいでいることが、社会の無縁化の本質であり、問題とされるべきではないでしょうか。

その一方で、今回の震災は、地域復興や再生という同じ目的に向かって人々が団結できる力を再認識した機会でもありました。血縁でも地縁でもない、新しいコミュニティをどう創造するのか、そこにSCのあり方が大きく関係するはずです。

(研究開発室 主任研究員 小谷みどり)